



① 旧中川家住宅
明治17年(1884)



② 中尾家
江戸末期 離れ明治30年(1897)



③ 河野家
明治後期(不明)
花屋火事以降(明治10年 1877)



④ 香川家
明治45年(1912)



⑤ 中野家
天保年間(1830~43)
日露戦争後(明治39年 1906)



⑥ 藤田家
大正7年(1918)



⑦ 上野家
明治30年(1897)



⑧ 竹田家
明治13年又は17年(1880又は84)



⑨ 中村毛糸店
明治25年(1892)



⑩ 西中呉服店
花屋火事以降(明治10年 1877)



⑪ 竹代文具店
明治29年(1896)以前



⑫ 重村家
日露戦争後(明治39年 1906)



⑬ 松浦家
明治30年(1897)



⑭ 浜崎家
明治30年頃(1897頃)



阿知須の居蔵造

阿知須の居蔵造は、『町史』によると「延享2年(1745)250戸、文化5年(1808)134戸」という大火災の経験から特別な許可が下り、お金持ちはいぐら屋と称する瓦葺・大壁(いぐら)造りの家が建てられたようになつた」とある。この時代の民家は、藁葺きで板戸や障子であったと思われ、風の強い日に、ひとり火事が起きれば大火になるであろうことは容易にわかる。

居蔵造のいわれ

阿知須の居蔵造は、廻船業を生業とする人たちが建てた、瓦葺き漆喰大壁の防火機能を有した住居である。

居蔵造の謂れば定かでないが、『風土注進案』によれば、阿武郡宇田浦の本陣金子幸蔵所が、天保末年(1840年)頃には「居蔵造」と称されていた。そのほか県下各地に古い瓦葺土蔵造の家が残っているが、「居蔵造」の名称は見当たらない。

しかし、岩国・周防大島・柳井・平生・宇部・長門地方など海岸部において、「いぐら」や「いぐらや」の名称が方言の中に残っていることが、報告されている。

